

令和2年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会

第3ブロック研修会議事録

日時 2020年11月14日(土) 13時30分～16時00分
会場 町田市庁舎 会議室3-1～3-3
出席者 講師：西行 恵、喜田 亮子
社会教育委員：吉田 和夫、瓜生 ふみ子、影山 陽子
仙北屋 正樹、池野 系、関根 美咲、小崎 公平
事務局：10名
参加者 会場 10名
オンライン 14名

<テーマ>

- 東京都市町村社会教育委員連絡協議会統一テーマ
開かれ つながる社会教育の推進
～住みよい地域づくりに多様な人材と連携を～
- 第3ブロック研修会テーマ
つながりいいことふくらむ地域社会
～コロナ禍での活動を通じた学び～

<次第>

- 開 会
 - ・開会挨拶 吉田 和夫(町田市社会教育委員・同市生涯学習審議会会長)
 - ・主催者挨拶 宮野 良一(東京都市町村社会教育委員連絡協議会会長)
 - ・開催市挨拶 坂本 修一(町田市教育長)
- 第1部講演
 - 講演内容 「生涯学習センターの講座から生まれた子育てグループの活動」
 - ・講師 西行 恵氏(らぶふぁみ事務局 代表)
 - ・社会教育委員 瓜生 ふみ子 仙北屋 正樹
関根 美咲 小崎 公平

○休憩

○第2部講演

講演内容 「社会教育と市民活動の連携

～町田市地域活動サポートオフィスの取り組みから～」

・講師 喜田 亮子 氏

(一般財団法人 町田市地域活動サポートオフィス 事務局長)

・社会教育委員 吉田 和夫 影山 陽子

池野 系

○閉会

・次期開催市挨拶 渡邊 真砂子 (稲城市社会教育委員の会議議長)

・閉会挨拶 瓜生 ふみ子 (町田市社会教育委員・同市生涯学習審議会副会長)

【研修会内容】

○開会

<開会挨拶 (吉田会長)>

本日は、都市社連協第3ブロック研修会にご参加くださり感謝申し上げます。コロナ禍のため中止している会議や研修会がある中で、開催するという一歩を踏み出すことが出来たのは、町田市の特色だと思っている。オンラインでの研修会は初めてということで、事務局と社会教育委員で準備を重ね、リハーサルも行っているが、オンラインは、当日に何が起こるか分からない。ご迷惑をお掛けすることがあるかもしれないが、ご容赦いただきたい。現在、町田市は、地域協働の新しいかたちを模索しており、社会教育委員のあり方も変わってきていると感じている。本日は、そのあたりも含めて参考にしていただければ幸いです。本日は、短い時間ではあるが、楽しんでいただきたい。

<主催者挨拶 (宮野会長)>

新型コロナウイルス感染症が、社会活動や日常生活にこれまで経験のない影響を与えている。人と接することを基本とする社会教育の諸活動も全て止まってしまった。こうした中、第3ブロック研修会の開催を実現させた町田市社会教育委員の皆さま並びに事務局のご尽力に心より感謝申し上げます。本年の都市社連協統一テーマ「開かれ つながる社会教育の推進～住みよい地域づくりに多様な人材と連携を～」を踏まえ、第3ブロック研修会は、「つながりでいいこと

ふくらむ地域社会～コロナ禍での活動を通じた学び～」をテーマに、オンライン研修会となっており、有意義な成果を期待している。各地域で活躍されている社会教育委員の皆さま方のますますのご活躍とご健勝を祈念して、挨拶とさせていただきます。

<開催市挨拶（坂本教育長）>

本日は、お忙しい中、都市社連協第3ブロック研修会にご参加いただき、感謝申し上げます。新型コロナウイルス感染症が世界中で第一波を上回る拡大をみせる中、国内の各自治体においても学校教育や社会教育の分野の活動について、市民の皆さまの安全性の確保と利便性・経済対策のはざまの中で、様々な工夫を凝らしてどうしたら実施できるか考えながら対策を講じていることと思う。町田市においても、私を含め教育委員の行事への出席や挨拶等は、極力、書面やオンラインでの参加に切り替えている。このコロナ禍において、注目を集めているのが、国のGIGAスクール構想やテレワークをはじめとするICT機器の活用である。これまでの日常から、人と人が対面しない、接触しないことが前提の新しい日常へ転換している。そのような状況の中、今回の研修会は、オンラインならではの工夫を取り入れて実施する。初めての試みであるため、至らない点もあるかと思うが、新たな研修のかたちを体感していただきたい。さて、第3ブロック研修会テーマは、「つながりでいいことふくらむ地域社会～コロナ禍での活動を通じた学び～」である。この“いいことふくらむ〇〇”というのは、町田市の魅力をより効果的に市内外に発信していくための町田市のロゴマークで、このフレーズをアレンジして設定した。本日の研修会では、子育ての学びからつながったグループの活動やNPO法人の活動等を町田市社会教育委員との対談でご紹介する。本日ご参加いただいた社会教育委員の皆さまは、日ごろから多方面でご活躍されている方々であるが、この研修会を通して、感じられたことが新たな発想につながり、地元自治体の社会教育活動に生かされ、ふくらんでいけば幸いである。

○第1部講演

講演内容「生涯学習センターの講座から生まれた子育てグループの活動」

講師：西行 恵（らぶふぁみ事務局 代表）

社会教育委員：瓜生 ふみ子 仙北屋 正樹（ファシリテーター）

関根 美咲 小崎 公平

仙北屋：まず、なぜらぶふぁみ事務局にスポットを当てたのかというと、都市社連協統一テーマと第3ブロック研修会テーマに共通している「つながる」

というキーワードから、これにあたる活動をされている方を探したところ、生涯学習センターの家庭教育支援学級から生まれたらぶふぁみ事務局の活動を知り、講師として来ていただくことになった。早速、ららぶふぁみ事務局についてご説明いただきたい。

西 行：私は、第1子出産後すぐに町田市に引っ越してきて、町田市の生涯学習センターの家庭教育支援学級や子育てひろばに参加し、他のママたちと仲良くなった。家庭教育支援学級では、保育士に子どもたちを見てもらっている間に、ママたちだけで学習することができ、子どもなしで様々なことを話せた貴重な時間であった。そこで、みんなで良い情報をシェア出来たらいい、自分たちで何か出来ることはないだろうか考えるようになり、共感してくれたママたちと一緒に、2017年9月に子育て応援フリーマガジン「らぶ♡ふぁみ」を創刊した。一緒に作成しているメンバーは、家庭教育支援学級で一緒だった方や子育て広場等で知り合った方々である。「らぶ♡ふぁみ」は、2017年9月から、3月と9月の年2回発行しており、現在までで6冊発行している。内容は、子どもと一緒にいける飲食店や場所、町田駅周辺の授乳室が一目で分かる地図、家族の健康を優先しがちなママのために、産婦人科医や専門家から健康に関するアドバイス等を載せている。また、町田市で活躍している方や子育てを応援してくれている方たちの紹介、ママや子ども向けのイベントや教室等の情報を掲示板として載せている。冊子を作るにあたっては、子育てを支援している企業が私たちに共感してくださり広告費というかたちで応援していただいている。このようにつながった地域の企業と一緒にイベントやワークショップも開催している。今後も、子どもと一緒に楽しく学べる場を作っていきたいと思っているが、コロナ禍で、学べる場づくりが大変難しくなっている。今年9月発行の「らぶ♡ふぁみ」についても、取材に行くことが出来なかったため、休刊というかたちをとった。コロナ禍で全てが止まってしまったが、3年間の活動を見直し考える時間ができ、また、オンラインによる様々なセミナーが自宅から受けられるようになって、子どもの送迎等で参加することが出来なかったセミナーに自宅から参加できるようになったため、これからの活動について道筋が見えてきたところである。

仙北屋：子育てをしながらこのような活動をするのは難しいと思う。集まった方々でどのような話をしたのか。

西 行：赤ちゃんや小さい子どもを連れて遊びに行ける場所、ママが子どもを連れて行ってご飯を食べに行ける場所等、生活に密着した知りたいことを話していた。

仙北屋：話し合いから発展してフリーマガジン発行までいくのは中々ないことである。なぜ、フリーマガジン作成となったのか。

西 行：今の時代SNSでの情報発信が多く、スマホを見る機会が多いが、産後のママにはスマホが辛いと感じることも多い。また出先で調べる時にスマホ片手に子どもといると良くない印象を持たれることも多々あるため、子どもと一緒に見ることが出来るフリーマガジンが良いと思った。また、孫育てしている祖父母にも活用してほしいという思いもあり、手に取りやすい冊子にした。

仙北屋：作成には、どのような苦労があったのか。

西 行：メンバーの中で、雑誌や編集などの職についていた者はおらず、全て1からの手探りでスタートだった。出産を機に仕事から離れていたため、営業や企画書の作成等自分たちの描いている想いを、企業に伝えていく事も大変だった。また、子ども達が小さく冊子を作るための時間をつくることも困難であった。

仙北屋：こういうものを作ることで、様々な効果が生まれると思うが、目に見えた効果はあったか。

西 行：見てくれたママやパパ、祖父母の方からの反響をいただき、同じように子どもとの生活情報を得たいと感じている人が多くいることが嬉しかった。応援企業の方々も、子育て中に役立つことや企業として何が出来るのかをヒアリングしてくれることが増え、親子に優しい場をつくることも出来た。

仙北屋：本当に良い活動をされていると思う。では、対談者の3人に、今のらぶふぁみ事務局の話聞いて感想や質問があればお聞きしたい。

小 崎：今の時代はネットやSNSが主流のため、フリーマガジンというのは盲点だった。フリーマガジンだと、手元に残り、お店にも置いてあることで長い間目に留まり、公民館、学校や保育園等の活動につながる効果がある。知らない環境で初めての人とコミュニケーションをとってつながるのは難しいことであり、そういう小さなことから始めて、フリーマガジン発行につながったことはすごい。ぜひこの活動が町田市の1つの「つながり」のモデルケースになり、広がってほしい。これからも頑張っていたきたい。

仙北屋：続いて瓜生さんお願いしたい。

瓜 生：ずいぶん昔になるが、町田地域限定で子育てガイドを発行したことがある。その時は、すでに自分の子どもは大きくなっていたため、皆さんのような苦労はなかったが、子どもが生まれてすぐの時に公園デビューをきっかけに子育てサークルを作った経験があり、仲間づくり

の大切さは分かる。働きながらこのような活動を行うのは大変だと思う。最近、パパの育児参加も増えてきたが、まだ少数派で残念である。「らぶ♡ふぁみ」を通して、自分発見や新しい仕事等何かみつかったか。

西 行：らぶふぁみを作った3年前は専業主婦だったが、子どもも大きくなり、今は幼稚園も預かり時間が長くなったため、メンバーも仕事復帰している。私自身も一番下の子が幼稚園に入園したため、保育士として仕事復帰し、「らぶ♡ふぁみ」を作っている。やはり、働きながら活動するのは大変だが、それでも私たちが続けていきたいと思うのは、ママたちからの役立っている、助かっている等の声でやりがいを感じていること、また、みんなでお出かけを楽しんでほしいという思いからである。「らぶ♡ふぁみ」作成を通して自分発見がたくさんあり、自分たちの気持ちを企画書にまとめたり、営業スキルがあったことにも驚いた。新しい自分に気づくことができた。

仙北屋：スキルが上がっていくのが感じられて、すばらしいと思う。続いて、関根さんお願いしたい。

関 根：出産直前まで仕事をしており、それまで地域のことを何も知らなかったため、いざ子育てとなったときに、困ることがたくさんあった。当時はスマホもなく、本屋に行ってもちょうどいい地域情報誌もなかったため、初めての子育てで、情報が無いのが不安だった。その頃に、「らぶ♡ふぁみ」のような冊子があったらよかったと痛感しており、地域で自分と同じ思いをしているママや先輩ママと出会い、助けてもらいたかったと思う。西行さんは「らぶ♡ふぁみ」を作り始めて、地域の方々との素敵な出会いはあったか。

西 行：冊子を作ることで出会えた方はたくさんいる。例えば、町田市は以前より子育て環境が良くなっており、それは先輩ママたちの働きかけや活動があったからで、町田市がどんなふうに子育てに力を入れているのか伺うことができた。また、冊子作りを通して、お互いがどんなことをやってきたのか情報交換もでき、様々なつながりができたと感じている。

仙北屋：それでは、ここで話題を変えたい。らぶふぁみ事務局の活動は地域社会で子どもを育てるきっかけになっている。この対談では、地域社会でどのような子育てをしていけばいいか、どういう子育てがあるのか、というところにテーマを当てていきたい。対談者の方々は、様々なところで活躍されている方々なので、それぞれの立場から地域社会における子育てについてお話いただきたい。

小 崎：町田市の市立中学校20校全てが集まる町田市立中学校PTA連合会

会長をしている。PTA活動は、地域での子育ての1つの基盤として長い間機能してきた。私自身も小学校からPTAに関わりだしているが、中学校は、より学校とPTAのつながりが深いように感じる。特に、中学校は進学という大きなステージがあり、学校と保護者が一体となって進めていかなければならない難しい問題である。そこにPTA活動を通して、深く関わり、そして、PTA活動自体が親の1つの成長の中核になっている。会長をしていると、様々な苦労や問題が出てくるが、共に対応していく役員は仲間として一生の友達になっていくのではないか。私は男性であるため、他のお母様方と親友になるというのは難しいが、それでも様々な活動を一緒に行っている。こういったことが地域における子育てのつながりになる。昨今、任意加入であるPTA活動への不満ばかりが目立ってしまう。当然負担はあるが、出来る方が出来る範囲でやる中で、非常につなかりを深くし、その人たちがさらに地元の人たちとつながっていく。こういったところに行政がしっかりと手を差し伸べているのが町田市の特徴だと思う。今後も、高い意識をもってPTA活動を行い、地域をつないでいきたい。

仙北屋：小崎さんはPTA活動のまとめ役としてご活躍されている。今、PTA活動は下火になりつつある。今のような話を聞いてみると、PTAは必要なものであると改めて思う。続いて、瓜生さんお願いしたい。

瓜 生：女性の就労支援や社会参加を応援するNPO法人を運営しており、1996年には町田子育てガイドを発行し1998年には町田ファミリーサポートセンターの政策提言をさせていただいた。子育て支援をする中で、様々な世代の方とのお付き合いがあったが、その中でも印象深いのは、自分の孫は遠くにいて見てあげられないが、近くのお子さんなら、と言ってシニアのご夫婦がお手伝いしてくださったことである。その時初めて、地域の方々の底力が見えた気がした。現在、町田市学校支援センターの運営をし、地域の方々と学校をつなぎ、豊かで開かれた学校になるよう支援しているが、パパの参加が少なく残念である。子育て・家事と仕事の両立は、女性だけの問題ではないと思っている。西行さんは、何か工夫はされているか。

西 行：保育士として復帰する際、夫と役割分担について話し合った。夫婦だと曖昧になってしまうが、新しい生活スタイルになるところには、喧嘩してもお互いの方向性を揃えておくと、大きなもめごとにならないのではないかな。

仙北屋：瓜生さんはNPO法人を立ち上げ、様々な活動をされているが、改めて話をお聞きして頭が下がる。また、男性の子育て参加の話があったが、

自分を振り返ってみると、私は教員をやっているが、妻から他人の子どもは育てても自分の子どもは何もみないとよく言われていたため、反省している。これからの男性の方々は、ぜひ子育てに参加していただきたい。続いて、関根さんお願いしたい。

関 根：学校支援ボランティアコーディネーター（以下、VC）として、地域と学校をつなぐイベント活動の企画運営等のコーディネートをしている。職場である金井中学校だけではなく、金井小学校でもお世話させていただくことがあるが、小学校1年生の保護者を見ていると、私の頃よりママ同士の横のつながりが薄いように感じる。保護者に聞いたところ、プライベートな関わりを持ってしまって他のママに借りを作りにたくない、個人で習い事をさせている方が気が楽と言っており、これが本音なのかと驚いた。子育てに不安があっても、お互い頼り合ったり助け合ったりする関係が出来ていない。そこで、私は、地域の幅広い年齢を結ぶために、保護者を含めた小中連携のイベント等を意識して企画している。小さなお子様やその保護者にお越しいただき、幅広い年齢のかたと知り合える機会を作り、自分の子育てに役立ててもらえれば、子育てが楽になる。そういうことを意識して仕事に取り組んでいる。西行さんにお聞きしたいのは、小学校に上がる前のママたちは、やはり不安なものなのか。

西 行：幼稚園や保育園から小学校に上がる時には、1年生の壁という言葉があるように、不安が大きい。今のお話のような活動があると、情報が得られてとても助かる。

関 根：小学校の保護者は、中学校へ進学する際にも不安を抱くものである。私は、その世代の地域の方々が学校とつながれる場所をどんどん作ってきたい。

仙北屋：関根さんはVCとして活躍され、小学校や町内会など、全世代に関わっている方である。ぜひ、今後もご活躍いただきたい。最後に、社会教育委員の皆様から、今後、どのように地域社会の子育てに貢献できるのかということでお考えがあれば伺いたい。

小 崎：PTA活動を通した話をさせていただくと、私の所属する中学校のPTAでは年に2、3回交流会があり、中学校に進学してくる4つの小学校のPTA役員と、中学校がどんなところなのかについて話す場となっている。中学校がどんなところなのか保護者の生の声を聞けるため良いと言われており、長く続いているイベントである。また、町田市全体の中学校の活動として、中学校を卒業するときに20歳の自分宛に手紙を書く。手紙は市で預かっていただき、成人式の日在当时PTA役員をしていた保護者が、子どもたちに手紙を返すという感動的な活動である。長

い間、そういった活動で地域と関わっているPTA活動がこれからも大切なのではないかと思っている。

仙北屋：町田市のPTA活動の目玉は、成人式の20歳の手紙である。みなさん苦勞されながら活動しており、そのまとめ役になっている小崎さんは大変だろうと思う。今年度も、よろしく願いしたい。続いて、瓜生さんお願いしたい。

瓜 生：子育ても変化してきているが、それでもママに対する支援が少なく感じる。しかし、何をしてあげたらいいのか分からず、若い世代とのコミュニケーションの難しさを感じており、何か良い方法を考えなければいけない。子育てもずいぶん変わってきているため、戸惑うこともあり、若い世代を尊重しながらどうやって子どもたちを可愛がることができるかが、今の私の課題である。

仙北屋：祖父母との関わり方は、難しいところがある。らぶふぁみ事務局にも、このあたりのことも考えていただきたいと思う。続いて、関根さんだが、実はリオデジャネイロオリンピックの代表になった関根花観選手のお母様である。ずっと花観選手を町田市で育ててきたと聞いているので、そのあたりもお話いただきたい。

関 根：娘は、幼い頃から走るのが大好きで、中学生の終わり頃から本格的に陸上を始めた。毎日、朝も夜も、暗い中を走っていたが、ある時、近所の方が、走るのに危ないからと安全反射ベルトを持ってきてくれた。また、レースに出るたび、地域の方が応援してくださり、いつも温かく見守ってくださった。地元の皆さまの気持ちが娘の大きな力になり、オリンピックに出られたと思っており、感謝している。現在、娘は競技を続けながら、子ども向けのスポーツイベントに参加したり、地元の学校でキャリア教育の講演会をして、少しずつ地域に恩返しをしている。まさしく、娘は地域に育ててもらったと思っている。

仙北屋：関根さんの方で、新たな活動をする予定があると伺った。その活動についてお聞きしたい。

関 根：まちかど子どもギャラリーを開催する。このイベントは、1カ月間、街中のたくさんの場所に子どもたちの作品を飾り、地域の方々に鑑賞していただくことで、子どもたちのことを深く理解していただきたいと思い企画した。最初は20ヶ所だった展示場所は年々増え、現在は、もう少しで50ヶ所になる。このイベントも、たくさんの地域の大人と子どもたちをつなぐものだと思っている。機会があったらご覧いただきたい。

仙北屋：地域社会への貢献ということでは、対談者は地域に貢献されている方々ばかりである。本日の対談で出た意見として、1つは、パパが子育てに

関わればもっと様々な活動ができるのではないかという点である。パパの協力により、ママがより活動できるようになるため、もっと子育てに参加するパパが増えてほしい。もう1つは、祖父母がどのように子育てに参加するかである。子育ての先輩が持つ経験をどう活かしていけるか考えていかなければならない。最後に、今後、様々な活動がつながり、全世代に渡る地域社会の子育てが出来上がるというのが理想だと思う。ここで、対談をご覧の方から、質問がきている。まず「らぶふぁみ事務局の会員数、会費、運営資金はどうしているのか」について、お答えいただきたい。

西 行：らぶふぁみ事務局は、サークルのような集まりのため、会費はない。メンバーは5人で、サポートメンバーが8名程度いる。資金については、応援企業の広告費で、活動費や製作費、印刷費を賄っている。

仙北屋：続いて、「年2回発行ということだが、もっと発行を増やさないのか」という質問だが、どうか。

西 行：本当は年4回発行したいと思っているが、まだ子どもが小さく、手を取られてしまう。また、メンバーも、幼稚園や学校の役員等をやっていたりするため、今の生活スタイルでは年2回が精一杯である。もう少し子どもが大きくなれば、増やせるかもしれないと思っている。

仙北屋：次の質問は、対談者全員に対しての質問になる。「地域で活動する様々な団体が横につながるような取り組みの事例、又はアイデアはありますか」という質問だがどうか。

瓜 生：まさに第2部の内容につながると思うため、第2部の話を伺いたい。

小 崎：東京都は各市町村に必ず青少年健全育成委員会があり、様々な方が、委員となっているため、子育てに関する新しい活動をするときには、利用すると良いのではないか。

関 根：町田市は小中学校62校全てにVCがいる。VCが中心となり、地域と学校を結ぶ仕事をしているため、様々な組織の方とのお付き合いはある。VCも、横のつながりを作る1つの方法ではないか。

仙北屋：町田市全体としては、横のつながりは結構あり、良い活動をしていると思う。詳しくは、第2部の講演会をご覧いただきたい。最後は「市民協働という言葉がよく聴かれるが、活動する上で行政側に求めることはあるか」という質問だが、どうか。

西 行：発行にあたり、様々なところに営業や相談へ行く中で、町田市の市民協働推進課にも相談し、コミュニティセンターや市民フォーラム等に冊子を置いてもらっているが、加えて、私たちが置いてほしいと思うところは、妊婦健診の会場等これから子育てをする方や町田市に引っ越してき

た子育て世代の方に身近な情報として配布できるようにしてもらえると嬉しい。

仙北屋：らぶふあみ事務局の方々、また、社会教育委員の方々同士もつながりを持ち、町田市の子育てを考えていきたいと思うので、今後ともご協力いただきたいと思う。これで、第1部講演会を終了する。

○第2部講演

講演内容「社会教育と市民協働の連携

～町田市地域活動サポートオフィスの取り組みから～

講師：喜田 亮子

(一般財団法人 町田市地域活動サポートオフィス事務局長)

社会教育委員：吉田 和夫 影山 陽子 (ファシリテーター)

池野 系

影 山：先ほどの第1部の質問で、横のつながりをどのように作っているかというものがあつた。第2部では、その答えとして事例を多く紹介できるのではないかと考えている。まずは、喜田さんから発表をお願いしたい。

喜 田：これからの対談の話題提供ということで、私から、町田市地域活動サポートオフィスの取り組みについてご説明する。町田市地域活動サポートオフィスは、昨年度、町田市の市民協働推進課が設置するかたちで立ち上がった組織である。まちの困りごとにみんなが楽しく取り組み、自分らしくいられる「まちだ」づくり、ということをビジョンとして活動している。具体的には、市民活動や地域活動を活性化させることを通じて、まちづくりの担い手となる市民の育成を目的として活動している団体である。私自身は、現在大和市に住んでいるが、桜美林大学の出身で青春時代を過ごした町田市で働きたいと思い参画した。前職では、トヨタ財団に勤務し、全国の地域活動を助成というかたちで支援していた。本日は、社会教育と市民活動の連携ということで、個人的にも、学びの場との連携がこれからますます重要になってくるのではないかと感じている。初めに、現在、どういう社会状況にあるのかということと学びの関係性について、お話しさせていただく。日本は、急激に人口が減少していく時代に入ってきている。それと同時に、近年の技術の進歩の速さは目覚ましく、瞬く間に社会が変化してきている。学校では、コロナ禍による緊急事態宣言で休校になったため、オンライン学習が非常に活発になり、全生徒にタブレットを配布するという話が進んでいる。オンラインが普及し、社会が変化していく中で、様々な課題が増加してきてい

る時代である。こういった中で学びがどのように変化しているのかというと、1つは、社会の変化に対応していくためには、学生時代だけの学びだけでは対応できないということ。もう1つは、基本的な技術や知識は、大部分をオンラインで習得できるようになってきていることである。生涯学び続けるということと社会教育がますます繋がっていく必要があり、学びをファシリテーションしていく、学んだ人同士をコーディネートするというような役割が大切になってくる。先ほどの第1部では、生涯学習センターでの学びから冊子が作られたという話であったが、その過程には、学ぶ場を提供した方や背中を押してくれた方、仲間づくりの場等プロセスごとにつないでいる存在がある。参加し、仲間ができて、活動がうまくいって、成功体験によりもっと頑張ろうと思う循環を後押ししてくれる伴走者のような存在が必要ではないかと考えている。今までの説明を踏まえ、我々がどのような事業をしているのかご紹介させていただく。1つ目は、伴走型連続講座「まち“だ”づくりカレッジ」である。活動している方々が事業計画を作る手伝いをする講座で、今年度は全てオンラインで実施している。講座の中では、グループワークや受講者が参加できるフェイスブックのグループを作って、参加したグループ同士の関係構築にも力を入れている。2つ目は、地域の課題と活動を知ってもらうための対話の場として「まち“だ”づくりサロン」を実施している。設定したテーマに関する活動をしている方の話を聞き、参加者は、話を聞いた後に対話しながら自分にどんなことができるか考える。講師陣は、実際に活動している方や行政の方、大学の教授等より多角的な視点でお話しただけの方を意識して選んでいる。3つ目は、「クラウドファンディング みんなでコロナを乗り越えるぞ基金@町田」である。町田市のまちの困りごとを最前線で支援している市民活動をみんなの力で応援することを目的に今年の夏に実施した。お陰様で目標としていた100万円を超えるたくさんのご支援をいただいた。このとき、我々が大切にしたのは、資金を集めるということだけではなく、社会や地域の課題を知っていただくために、期間中にホームページで様々な活動のレポートを発信したり、チャリティーイベントを開催した。4つ目は、市民協働フェスティバル「まちカフェ」である。市民活動をしている方々が集まり、お互いの活動を知って協働のきっかけを作っていくことを目的としたイベントである。今年度はコロナ禍のため、オンラインや市内で分散開催するかたちで実施することになった。実行委員会の会議も全てオンラインで実施したが、中にはオンライン会議が初めてだった団体もあり、そういう団体は、オンライン会議のための講座に参加していた

だく等工夫した。5つ目は、「ファシリテーター養成講座」で、会議はもちろん、育児や友人とのやり取り等の場面でも活用できるファシリテーションの基礎知識を、ワークショップに取り組みながら紹介している。図書館との連携では、ブックリストや講座の内容に関係する本の選書コーナーを中央図書館に設置した。このように、他の施設の学びと連携していくことも今後進めていきたいと思っている。最後に、私たちの取り組みではないが、新しく公民館の「しあさって」というプラットフォームをコーディネートさせていただいたのでご紹介として載せている。私からの説明は、以上である。

影 山：これから、学びと活動をどうつなげていくかという視点から、対談していきたい。私の感想としては、小さな芽を丁寧に育て、つなげて循環の中で成長させていくという活動をされているのがよく分かった。先ほどの資料に、公民館の様子が映っていた。私も社会教育委員として見学させていただいたことがあるが、町田市は非常に多くの高齢者が積極的に参加していることが印象に残っている。今の喜田さんの説明から、池野さんに高齢者の学びと活動についてお話しいただきたい。

池 野：町田市の高齢者が活発に活動しているということは、よく他から聞き聞いている。最近の高齢者は、家に居場所がない、時間があってもすることがないといった理由から変わってきて、ボランティアや仕事など様々なことにチャレンジしたいという方が増えてきた。しかし、コロナ禍になり、家族の反対や、公共交通機関を利用するのが怖いということで、活動が制限されてしまっている状況である。そのような状況の中で、フォローしていくためのヒントがあれば、教えていただきたい。

喜 田：コロナ禍で外に出たくないという方もいる一方で、注意しながら活動を続けていきたいと思っている方もいると感じている。オンラインでの会議やイベントを実施する機会も多いため、そういうことが難しい方は、事前に相談に乗り、それでも難しい方は事務局と一緒に操作する等個別のフォローを丁寧にやっていくしかない。私たちが支援している団体では、ポストを設置し、そこに手紙を入れればスタッフが返事をするといったアナログなつながり方をしているところもある。どのような対応がいいのかは、トラブルや難しいことがあるたび一緒に考えながら乗り越えていくしかない。

池 野：家族がフォローできる体制があればいいが、孤立しがちな高齢者も一定数いる。きめ細やかな体制が必要である。

影 山：コロナ禍で、オンラインという新しいものに挑戦する高齢者の方々がいらっしゃると思うが、どのように変わってきているか。

- 喜 田：「まちカフェ」に以前から参加している団体は、高齢者も多く、オンラインが始めての方もいた。オンライン会議に抵抗があった方もいたが、頑張って参加したら、今は自分たちの会議にもオンラインを取り入れたり、新しくパソコンを買った方がいたり、1度成功体験をすると続く方が多い。今回の「まちカフェ」では、学生がボランティアで講師となり動画作成講座を行った。写真をつなげて音楽を入れるという簡単な動画作成で、年齢の高い方もご参加いただき、新しい技術に触れることで多世代交流ができると思っている。高齢者の方も学生に言われたほうがやる気になることもある。コロナ禍でのピンチを逆手にとり、多世代交流ができるのではないかな。
- 影 山：世代間格差は非常に感じることが多い。コロナ禍がその格差を埋めていく機会となると良い。高齢者も、オンラインができれば、他とつながることができると思うが、どうか。
- 池 野：私と一緒に仕事をしている高齢者は、60代から80代の方がいるが、そこだけでも世代の差がある。60代の方は、スマートフォンも使い、ICTに対するハードルも低い。一方で、そこを超えられない80代の方もおり、今の話にあったように、学生にきめ細かいサポートをしてもらい乗り越えることができれば、高齢者に限らず世界も広がると思う。
- 影 山：吉田先生は、普段からオンラインを活用し、学生にも教えられていると思うが、このあたりどうか。
- 吉 田：大学では、オンラインにせざるを得なくなり、学んだ。そういうことからすると、オンラインにも壁があるとは思っていない。オンラインにより、可能性が広がることの方が大きい。町田市地域活動サポートオフィスのすごいところは、一般財団法人であるため基盤がしっかりしていること、また、市民協働推進課や事務局職員の今までの経験等の専門的な知識がたくさんあることで、このような組織が町田市にできたのは素晴らしいことである。同時に、自分の住んでいる市はどうなのかと考えてみると、中々、町田市のようにはいっていないように思う。そういう地域に、地域活動サポートオフィスが何らかのノウハウの提供や指導する等、他の地域とも広くつながるといった構想はあるのか。
- 喜 田：お声掛けがあれば、他の地域にも行きたいと思っている。他の地域でも、非常に先進的な活動をしている団体があり、我々が様々な事業を手掛けるときは、先に取り組んでいる団体の情報を参考にし、オリジナルを考えている。地域を超えて真似をし合い、少し進化させていくことで、新しいものが生まれる。お互いが学び合うことで、様々な地域で良い活動が生まれくる。

- 影 山：私も、昨年仲間と NPO 法人を設立したが、設立の際、喜田さんが言っていた情報を得られたらよかった。情報が必要な方に、どう届けるか。どこにいけば情報が得られるのかわからない人がたくさんいる。そのあたりの工夫はあるか。
- 喜 田：実際に情報が必要な方まで届いていないと感じてはいるため、情報発信には力を入れるようにしている。SNS から紙媒体、口コミなど様々なものを活用しているが、高齢者だと町田市の広報や回覧で情報を得る方も多いため、行政にもお力添えいただくと情報を広げていくことができるのではないか。行政からの情報発信は隅々までいきわたる力を持っているが、民間での活動では使うことが出来ない。行政と民間がうまく連携できれば、もっと様々な方に情報を届けることができると思う。
- 影 山：まさに、第2部のテーマの連携というところだと思う。連携という部分では、吉田先生どうか。
- 吉 田：SNS 自体にも大きな効果はあるが、SNS だけではなくリアルも大切である。リアルには2つあり、1つはマガジンや冊子を見ること、もう1つは実際に人に会うということである。SNS とリアルをバランスよく地域活動の中で位置づけていくためには行政の支援が必要で、知恵やノウハウ等の仕組みを効果的に提供していくことが大切である。これからの地域活動は、学びを中核にする地域協働や地域課題の解決が必要になってくる。先ほど、大学との連携の話があったが、幼少中高大の連携をもう少し地域活動の中に位置づける必要があると思うが、いかがか。
- 喜 田：私は仕事で、様々な NPO 法人や市民活動をしている方に知り合い、大人になってからたくさんの働き方や生き方、キャリアの積み重ね方を知る機会があった。普段、生活していると知っている職業は親の職業や学校の先生、医者等の身近な職業になってしまうが、他にもたくさんの活動をしている人がいる。NPO 法人だけで約190団体、法人格を持っていない団体もたくさんあり、そういう方たちが、学校等に行って、自分たちの活動や生き方等を子ども達に伝える機会を作ることで、働き方や生き方の多様性を感じられるようになる。学校教育とそういう活動をしている方たちが触れ合えるつながりがあれば良いと思う。
- 吉 田：学校では出来ないことを第3の機関がやり、そこに学校が協力して地域で担っていくということが必要である。学びを中核にして、地域活動というものが、学び合い、支え合い、教え合って、人とつながっていくことが大切である。子ども達の学びの場を社会で作っていければと思う。ぜひ、町田市地域活動サポートオフィスに頑張ってください、展開していただけるとおもしろいと思う。

- 喜 田：学校教育とつなぐということでも、今後何かできればと思っている。
- 影 山：働き方も、今、変化してきているように感じる。日本は、基本的に終身雇用、年功序列で組織に依存して生きてきた人が多い。今は、もう少し緩い働き方を選ぶ方も増えており、組織になじまない人も自分らしく働くことが選択できる時代がきている。池野さんに伺いたい、今の高齢者の方たちは、どのような働き方をしているのか。
- 池 野：町田市の地域性を見ると、経済的には割と裕福な方が多いと言われている。その中では、今まで週5日働いて引退された方の多くは、週2、3回で働くのが希望だと聞く。引退して次にどんな仕事がしたいかとなったとき、以前は、今までと同じような事務職や警備員等ホワイトカラーに近い仕事を選択される方が多かった。今は、他のことをやるために仕事を少なくしたいという方が増えてきているのは確かである。仕事以外に何がやりたいかという、例えば、地域の学校に関わること等自分の住む地域で活動し、地域に貢献したいという気持ちがある方が多い。しかし、そこにどう入っていけばいいのか分からないというのが課題になっている。地域のために学び、学んだことをどう地域に還元していくのが課題だと思う。
- 影 山：どう関わっていくのが重要で、そういったときに、喜田さんがやっているような活動が大切だと思う。共生というところで、私からも伺いたい。現在、人口減少で、農家やコンビニで働く方が少なくなっているが、そこに外国人労働者が入って、日本の社会を支えている。そういった外国人の地域への参加については、どのように考えているか。
- 喜 田：現状でいうと、町田市の中で多文化共生という分野で活躍している団体は多くない。私が住んでいる大和市は、外国人が多く住んでいる地域で、外国人を支えている市民活動が多い。外国人は、同じ出身地のコミュニティを作りお互いの生活を支え合っており、その活動を支えている市民活動がある。町田市だと、町田国際交流センターが日本語教室の開催や、当事者同士のつながりを作る等の事業をしている。やはり、外国人を含め、多様な人が地域で暮らしていくとなると、1人ひとりのニーズや課題を解決するためには、公的機関では難しいところもある。市民や地域の小さな活動がたくさんあることで、福祉では支えられないものを支えることができ、結果的に暮らしやすい地域になる。小さな困りごと等に目を向けていくことが重要だと思う。
- 影 山：今、喜田さんが話された取り組みは重要だと思う。ここで、いくつか質問がきているのでご紹介する。まず、「まちカフェご紹介ありがとうございます。他に新しいアイデアがあれば教えてほしい。」という質問だ

が、どうか。

喜 田：以前、まち“だ”づくりサロンで引きこもりや若者の支援をしている団体をご紹介した際、担当者から、「社会的孤立を考える」というテーマにしたいとのご提案があった。少しテーマを広げて、「社会的孤立」とすることで、引きこもりに限定されず、単身高齢者等誰にでも当てはまる大きな枠で人が集まった。テーマを広げることで、様々な方が集まる場を作ることができると思う。

影 山：2つ目は、「事業内容によって、対象年齢が固まってしまうがちのため高齢者と若者の世代間交流をどう満たすかが課題である。何か事例やご経験、アイデアがあれば教えて欲しい。」という質問だが、どうか。

喜 田：私たちの事業は、意外と多世代で、ご紹介した、まち“だ”づくりカレッジも比較的シニアの団体、ママさん団体や若者の団体が参加した。社会活動している者同士気が合い、盛り上がっている。町田市には多くの大学があるため、今年は、大学生と団体をつなぐということにチャレンジしており、来年度以降もっと広げていきたいと思っている。情報発信の際、1つの発信方法だと偏りがでてしまうため、発信の仕方を多様にしてみると良いのではないか。

影 山：発信方法を変えるというのは、様々な団体に使える良いテクニックだと思う。次は「コロナをきっかけにオンラインの促進など、状況に応じた変化が求められている。新しい取り組みを始めるときの苦労や工夫はあるか。」という質問だが、どうか。

喜 田：自分たちの会議をオンラインでやったことはあったが、オンラインでのセミナーは今年の6月が初めてだった。まちカフェ実行委員会の会議は、1回に30人程出席するため、最初は本当に大変で、職員総出で対応し、リハーサルも何回もやる等苦労がたくさんあった。それでも会議に参加できなかった方がいたり、電話でずっと話してもつながらない方がいたり問題が起こるが、やるごとに経験を積んでいくしかないと思っている。

影 山：残り時間も短くなってきた。喜田さんの発表は非常に多岐に渡っていて、1つ1つをもうちょっと詳しく伺いたかったというのが私の感想である。他の対談者の方からも感想を伺いたい。

池 野：私が仕事で関わるのは高齢者のため、世代間交流は魅力的である。高齢者から、例えば学校の仕事で子どもの近くにいることが若返る秘訣になるという話も聞く。世代間交流により、もう一步自分にできることを探し始めるため、学びにつながっていくと思う。本日は、貴重なお話を聞けてよかった。

吉 田：まち“だ”づくりカレッジがおもしろい。伴走型の連続講座を事業にしたのが良い。日本はこういう養成をするものが少ない。現在は、多様な働き方があり、老若男女や年齢問わず、起業することができる。子どもと一緒に起業するというのも理想の姿ではないかと思っている。

喜 田：つながることで新しい価値が生まれるということを再認識させてもらった。コロナ禍で大変なことがあっても、皆さん頑張っているため、今後も連携しながら、地域を良くしていく活動をしていきたい。私たちのやってきたことをどんどん発信し、今後、他の地域とのつながりもできるように成果を積み重ねていきたい。

影 山：町田がそのプロトタイプになれると良い。オンライン会議で研修会を開催するのもすばらしいチャレンジである。学び続けていくということが、1つのスタンスだと思う。今の課題を解決しても、すぐに次の課題が出てくる。それを楽しみながら、みんなで解決していくことが大切ではないか。これで、第2部を終了する。

○閉会

<次期開催市挨拶（渡邊会長）>

初めての、オンラインの研修会ということで、社会教育委員並びに事務局の方々は苦勞されたと思う。良い経験をさせていただき、感謝申し上げます。ぜひ、この研修会のノウハウを他市にもつないでもらいたい。来年度は、関東甲信越静社会教育研究大会東京大会があるため、そちらをブロック研修会とさせていただく予定である。コロナ禍の中、どのような開催の仕方になるのか分からないが、皆さまの応援をいただきながら、盛り上げていきたいと思っているので、よろしくお願ひしたい。

<閉会挨拶（瓜生副会長）>

会場及びオンラインでご参加いただいた方々におかれては、長い時間にわたりご覧いただき、感謝申し上げます。また、本研修会を非常に有意義なものとしていただいた講師の方々には、心よりお礼申し上げます。さて、本日の研修会は、都市社連協統一テーマ「開かれ つながる社会教育の推進～住みよい地域づくりに多様な人材と連携を～」、そして、第3ブロック研修会テーマ「つながりでいいことふくらむ地域社会～コロナ禍での活動を通じた学び～」で開催させていただいたわけだが、非常に熱気のこもった、内容の充実したものであったと思う。新型コロナウイルス感染症が収まらない中、ますますこのテーマが重要であり、また、関心の高いものであるということを改めて実感している。本日、研修会に

ご参加いただいた方々におかれては、この研修会を参考にさせていただき、つながる社会教育の推進の担い手としてご活躍いただきたい。研修会開催にあたり、初めての試みであったオンライン配信については、町田市職員の方々のご尽力に心より感謝申し上げます。研修会が皆様にとって有意義なものとなるよう祈念し、閉会の言葉とさせていただきます。